

現代中国の言論空間

—雑誌『炎黄春秋』をめぐる政治力学—

及川 淳子

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Speech Space of Modern China

—Political Dynamics over the Magazine *Yanhuang Chunqiu*—

OIKAWA Junko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The major purpose of this dissertation is to analyze the political dynamics in the speech space of modern China, by focusing on the monthly magazine *Yanhuang Chunqiu*, a historical magazine that primarily discusses modern and contemporary Chinese history. The magazine in recent years has become a forum for debate regarding current affairs and often addresses topics of political reform based on historical criticism. In addition, the speech space in the magazine is used to promote political reform by providing reformists of the Chinese Communist Party's (CCP) opportunities for debate. This paper focuses on issues, such as editorial policy, the founding of the magazine, the human network surrounding the magazine, and the main themes articles published in the magazine, as well as, the comparison with other magazines. The dominating discussions in *Yanhuang Chunqiu* focus on issues generally shied away from within China such as political reform debate including "Political Criterion" of the "Political Prohibiting Area." Even during the current administration, the existence of the reformer Lao Ganbu (Retired Cadres or Old Cadres) of the Hu Yaobang era uses the effective network to initiate political reform in China.

1.はじめに

現代中国の言論空間を考察することは、「誰が、何を、どのように発言するか」という問題のみならず、「どのように発言できるか／できないか」という問題を内包する政治的な課題である。中国共産党による一党支配の政治状況下において、言論空間の様相は中国社会の現実を如実に反映するものであり、メディアの存在とそれを取り巻く状況への分析は、現代中国への理解を深める上で有用な視座を提供するものと考えられる。

本稿ではこうした問題意識に基づき、雑誌『炎黄春秋』を事例として現代中国の言論空間における政治力学について検討する。『炎黄春秋』の詳細については後述するが、近現代を中心とした歴史雑誌でありながら、近年では歴史批判に立脚した時事問題や政治体制改革

に関する評論を数多く掲載しており、共産党内の改革派を中心とする議論の場として独特の言論空間を形成している。『炎黄春秋』の特性を検討することは、変容する現代中国の言論空間を分析する上での基点設定ともいえるだろう。

筆者が『炎黄春秋』を分析対象とする根拠は、第一に、編集や執筆に参加する人的ネットワークの特性、第二に、歴史読本からオピニオン誌への変化、第三に、政治体制改革論議の中心的役割、第四に、胡耀邦や趙紫陽など中国国内のメディアでは現在語られることが少ない人物への積極的なアプローチ、第五に『炎黄春秋』に対する政治的な圧力について、考察の必要性を考えたからにほかならない。香港や海外では『炎黄春秋』の存在意義を重視する報道があるが¹、しかしなが

ら『炎黄春秋』については本格的な研究がなされていないことも事実である。関連する文章は関係者の回顧録がほとんどであり、『炎黄春秋』についての論考は、中国社会科学院近代史研究所の劉志琴が2003年に愛知大学で開催された国際シンポジウムで報告した「老革命家の新たな覚醒——『炎黄春秋』の批評と分析——」が唯一の主要なものである²。中国国内においては敏感な言論問題は政治問題に直結するため、『炎黄春秋』を研究対象とすることは非常に困難だと推察される。なお、日本語で発表された学術論文は、個別の歴史的問題に関する参考資料としての扱いがほとんどであり、一部に目録の整理はあるものの『炎黄春秋』を研究対象とした論考は管見の限り見られない³。

本稿では、『炎黄春秋』に対する研究は現代中国の言論空間に作用する政治力学の一端を解き明かす試みであると考え、創刊の背景、編集方針と人的ネットワーク、掲載記事の主要テーマ、同時代の他誌との比較から『炎黄春秋』の特性を考察する。その際、『炎黄春秋』の独自性を創出しているものに対する分析概念として、『政治的尺度』の把握と操作」という仮説を設定して検討する。「政治的尺度」とは、中国のメディアが政治的に敏感な報道をする際に使用されることの多い用語である。主に二つの面で使われることが多く、第一に中国共産党中央宣伝部などメディアを管理監督する当局から個別の事案ごとに指示される報道規制の具体的内容を意味する。それらは通常明文化されることは少なく、メディアに対する有形無形の圧力となっている。

「政治的尺度」のもうひとつの意味は、当局からの報道規制に対するメディア側の対応である。各種規制を熟知した上で独自の報道を行おうとする機知や手法を指し、メディア従事者が「政治的尺度」を使用する際にはほとんどがこの意味だ。『炎黄春秋』の呉思編集長も、筆者のインタビューに対して「尺度」という表現を使用したことがある⁴。呉思編集長は台湾の『中国時報』のインタビューに対して、「仮に内容に富んだある文章が尺度を超えていたとしたら、編集段階で注意深く文章の性質を尺度の内に納めるだろう。また仮に尺度からまだ距離がある文章ならば、編集段階でいくらか大胆になり、尺度により近づくような感じにさせるだろう」と語っている⁵。『台湾時報』の記者はこうした手法を「エッジボールを打つ」と表現しているが、

ぎりぎりのラインで規制に抵触せず挑戦を試みるメディアの現状を象徴する表現だといえよう。しかし、具体的な「尺度」に関しては、呉思編集長は「それは20数年のメディアでの経験によるもので、はっきりとは言えない」と答えている。報道の現場で使用される抽象的な概念ではあるが、「政治的尺度」をいかに把握して巧みに操作するかという問題は、言論事情を分析する上で欠くことのできない視点であるといえよう。先駆的な改革論議を展開する『炎黄春秋』は、言論空間に作用する政治の現実を把握する力を備えており、そのような『政治的尺度』の把握と操作」が、『炎黄春秋』の優位性を高めていると考える。

本稿が副題として記した『炎黄春秋』をめぐる政治力学」とは、『炎黄春秋』をとりまく「政治力学」という外的要因のみを指すものではなく、『炎黄春秋』に内在する「政治力学」でもあることを指摘しておきたい。また、具体的な調査の対象とするのは、筆者が所有する近年数年分の同誌、『炎黄春秋』ホームページに掲載されている2000年以降の掲載記事と主要執筆者のデータベース⁶、中国知網（CNKI）で公開されている掲載記事データベースであり⁷、1991年7月の創刊以降2009年6月発行までの計219冊について検討する。なお、本稿においては『炎黄春秋』の特性を明らかにすることを課題とし、同誌における政治体制改革の具体的な議論、胡耀邦、趙紫陽記念の記事掲載についての考察は、別途稿を改めて論じたい。

2. 『炎黄春秋』の編集方針と人的ネットワーク

2.1. 中華炎黄文化研究会と蕭克將軍

『炎黄春秋』は炎黄春秋雑誌社が発行する月刊誌で、1991年7月に創刊された⁸。奥付には「主管・主宰機関」として中華炎黄文化研究会と記載されている（以下、「研究会」と略記）。「炎黄」とは中華民族の祖先といわれる伝説の炎帝と黄帝のことで、「炎黄」は「中華」を象徴する言葉で、「炎黄子孫」といえば「中国人」の例えだ。研究会は「中華民族の優秀な文化を発揚し、民族精神を振興させ、中国の現代化建設と統一という大事業に貢献する」という宗旨に基づき、全国規模の民間文化団体として1991年5月10日に北京で成立した。改革・開放政策により国内外の交流が盛んになる中で、海外の華僑との交流や台湾との統一の観点から文化交

流推進を目的としていたようである⁹。中国では各種団体の政府機関への登録が義務付けられているため、研究会は「民間文化団体」という位置づけではあるが、文化部と民政部に登録されている。

研究会の設立大会には、当時政治局常務委員であった李瑞環、中国共産党中央顧問委員会（以下、「中顧委」と略記）副主任で研究会名誉会長の薄一波、全人代副委員長で研究会会長の周谷城、中顧委常務委員で研究会執行会長の蕭克が出席して記念講話を発表した¹⁰。これらの出席者は、研究会と『炎黄春秋』の政治的な優位性を象徴しているといえよう。特に、蕭克は『炎黄春秋』の創刊に重要な役割を果たした。蕭克は中央軍事委員会委員、国防部副部長、軍政大学校長、軍事学院院長を務め、「蕭克将軍」と呼ばれた軍の長老だった。創刊10周年の際には蕭克と『炎黄春秋』に関する文章が発表され、「10年来、蕭老の『炎黄春秋』に対する指導、支持、擁護は直接的でもありまた間接的でもあったが、それらはいずれも深く、長きにわたるものであった」と評価されている¹¹。

研究会の活動内容は、蕭克が1992年の新年茶話会で語った講話で詳しく述べられている¹²。設立当初の目的は、1.炎帝黄帝の彫像建立、2.『炎黄春秋』創刊、3.「炎黄文化と民族精神」学術座談会の開催であり、同年の活動目標として、1. 陝西省の黄帝陵修復支援、2.全集『中華文化通史』の編纂、3.「中華文化知識」の宣伝普及活動、3.「毛沢東と中国文化」国際シンポジウム開催に言及している。研究会の主旨は「中華文化」の振興であったが、実質的には党の老幹部たちを中心とする文化活動の場であったようだ。当初、『炎黄春秋』は研究会の活動の一部であったが、その後は研究会よりも『炎黄春秋』の存在感が次第に大きくなったといえよう。『炎黄春秋』の創刊と時を同じくして、党指導部の若年化を目的に老幹部引退の過渡的措置として設置されていた中顧委が1992年の第14回党大会において廃止された。元委員の活動の場が制限されたことから、『炎黄春秋』は蕭克に代表されるような中顧委の老幹部を中心とした言論活動の場という役割を担うようになったと考えられる。

研究会執行会長だった蕭克が『炎黄春秋』に寄稿した文章を見ると、わずか11篇と多くはないがその内容の変化が興味深い。創刊間もない頃は学術討論会での

あいさつや研究会発行の書籍に関する文章が掲載されるのみであったが、1994年5月に「中華民族の優秀な文化の伝統を發揚し、社会主義精神文明建設を強化しよう」という論文を発表、翌6月には「陳独秀詩集序」で陳独秀を再評価し、研究の必要性を呼び掛けた¹³。蕭克は以前から「陳独秀の問題は、かつては禁区（タブー）で、現在は半禁区だ」、「陳独秀をまじめに研究しなければ、将来党史を書いても一面的になってしまうだろう」と主張していたという¹⁴。中国共産党の創立に貢献しながらも、その後コミンテルンとの関係や党内部の権力闘争に影響を受け研究が進まなかった陳独秀について積極的な発言をしたことは、歴史研究や言論問題に対する蕭克の態度表明であったといえよう。

蕭克が1998年に発表した「伝統文化の知識経済時代における歴史的使命」は、「知識経済」が盛んに議論された当時ならではの提起であった¹⁵。また、2006年の「党内民主欠如の教訓」では「歴史とは畢竟するに變更不可という規律を自ら有するものである。ひっくり返された真偽、善悪、是非の全ては本来の姿を取り戻すだろう」と述べた¹⁶。「党内民主欠如の教訓」は、『炎黄春秋』誌上における蕭克の政治的遺言であったと考えられる。蕭克は2008年10月24日に102歳で死去し、追悼特集として掲載された編集部の文章は「蕭克と歴史問題の撥乱反正」と題された¹⁷。「乱れた世を治め、正しい状態に戻す」という意味の「撥乱反正」は、蕭克の『炎黄春秋』に対する貢献とともに、『炎黄春秋』の歴史に対する姿勢を印象づけることになったのである。

2.2.蕭克の宗旨と編集方針

『炎黄春秋』は、中国の近現代を中心に歴史的な人物や事件について当事者や関係者の文章を掲載することを最大の特徴としている。創刊当時、蕭克は同誌の品格と品質について「求实存真（現実を重視し、真実を残す）」という言葉で提起した。蕭克は後漢の哲学者王充の「誉人不増其美、譏人不益其惡」という言葉を好み、自身の言葉で「善人や慶事を書くのは適切でなければならず、粉飾してはならない。悪人や敵について語るのも、度を越してはならない」と解釈している。蕭克は機会あるごとに王充の言葉を用い、「歴史は歴史であり、人為的に事実を歪曲してはならない。真理はただひとつであり、ある種の“政治的な要求”によって

変えてはならない。錦上に花を添えるように美化することを好んだり、あるいは井戸に落ちた人に石を投げ込むような行い、甚だしきに至っては資料をでっちあげたり、事実を歪曲するような同志もいる。“これは非常に良くない”。“これは唯物主義の姿勢ではない”と主張した。歴史に対する姿勢は、蕭克が軍人として歩んだ生涯の中で身を以て得た教訓だったのかもしれない。「歴史の事実が最大の権威である」、「歴史研究をする同志は必ず“求实存真”でなければならず、本心に逆らった論を述べてはならない」などの言葉とともに、蕭克の主旨は『炎黄春秋』に直接的な影響を与えることとなった¹⁸。

『炎黄春秋』の裏表紙の内側には、その編集方針が記載されている。「实事求是、秉筆直書、以史為鑑、與時俱進」の16文字のスローガンは、「事実に基づいて真実を求め、正直に筆を取って書き著し、歴史を鑑として、時代とともに前進する」という意味だ。編集部による紹介は「歴史を主とする総合的なノンフィクションの月刊誌。古今中外、特に現代の革命と建設の重大事件や重要人物の是非や功罪について詳細で正確な資料に基づいて正直に書き著し、事実をありのままに記し、飾らず、酷過ぎることもなく、事実を重んじて真実を記録し、歴史を鑑とし、歴史を以て社会の安定に資する」とある¹⁹。これらの文言はまさに蕭克が重視した「求实存真」にほかならず、蕭克の主旨が継承されているといえよう。

現在の編集方針は蕭克の主旨に極めて近いが、創刊以来具体的にどのような編集方針で発行されてきたかという変化を考察するには、毎年初めに掲載される「新春寄語」、「新年致読者」などの編集部から読者へ向けた新春メッセージを比較すると興味深い。以下、毎年の第1期号を概観すると、1992年の「新春寄語」には「民族の優秀な文化の発揚を志し、民族自強の精神を振興し、中国内外の炎黄の子孫を団結させ、祖国統一の大事業と精神文明建設を促進する」という理念が掲げられている。研究会設立当初の理念に等しく、当時の江沢民総書記の「統一祖国、振興中華」という発言を引用している点も注目される²⁰。祖国統一と中華文化振興の拠り所として、読者に「炎黄の子孫」という中国人としてのアイデンティティを訴えている。1995年には「中華民族の優秀な文化を発揚し、社会主

義精神文明建設を促進し、愛国主義教育を行うには、我々の歴史から離れるべきではなく、離れてはいけないのだ。歴史は我々民族の根であり、我々の文化の源である」という記載がある²¹。当時盛んに提唱されていた「愛国主義教育」というキーワードを盛り込みながら、歴史を語る重要性を説いている。

編集方針の変化を読み解く上で重要なのは、1999年の「忘れてはならない“歴史を鑑とする”」の文章だ。歴史の重要性を説いていることには変わりはないが、反右派運動、大躍進運動、文化大革命などの例を挙げながら「歴史上の成功の経験だけを手本とし、歴史の失敗と教訓を軽視する」ことに異を唱えた。「富強、民主、文明、近代化の中国を建設するという志のもと、更に大海の気概を以て、異なる声、異なる意見を受け入れるべきだ」、「異なる意見の平等な論争は、我々の認識をいっそう真理に近づけるだろう」という主張からは、歴史に立脚した活発な議論の場としての自負を読み取ることができる²²。

『炎黄春秋』の編集方針は、2000年代に入ってさらに変化した。2000年の新春メッセージでは、改革・開放政策は「中国が繁栄と富強、民主と自由に向かうために必ず通るべき道」だと強調し、春秋戦国時代の「百家争鳴」や五・四運動時期に提唱された「徳先生と賽先生（デモクラシーとサイエンス）」などの歴史に学ぶ重要性を主張した²³。2001年は編集顧問の杜潤生が『炎黄春秋』の責任」と題した新春メッセージを寄稿し、歴史批判の方法によって発言する知識人に活動の場を提供するという「特殊な責任」を同誌が負っていると述べた。また、『炎黄春秋』は歴史の経験を総括する際に常に民主と政治体制改革の問題に言及するが、これは第15期五中全会のコミュニケにある政治体制改革の任務の推進と一致すると強調した²⁴。2003年の「新春寄語」では第16回党大会で提起された「社会主義民主政治を発展させ、社会主義政治文明を建設する」という号令を引用し、胡錦濤総書記を中心とする新たな指導部に対して「前途に楽観的な態度を抱いている」というメッセージを記した²⁵。

その後も、2004年は「以人為本（人を根本とする）」とGDP至上主義への批判²⁶、2005年は「科学的発展観」と「政治体制改革」²⁷、2006年は「科学的発展観」になぞらえた「科学的歴史観」²⁸、2007年には鄧小平が

1982年に語った「あらゆる改革が最終的に成功するか否かは、やはり政治体制改革が決定する」という言葉をそれぞれキーワードにしながら、『炎黄春秋』の理念を主張した²⁹。2008年は、ベストセラーになった『民主とは良いものだ』のフレーズを借用して経済発展による「社会的不公正」を批判し、「積極的かつ穏健に政治体制改革を推進すべきだ」と主張した³⁰。2009年は「实事求是」と蕭克の座右の銘「誉人不増其美、謾人不益其悪」を再度引用し、「我々の編集方針、主張と追求は我々が認識した歴史のロジックを源としている」という言葉で結んでいる³¹。

創刊当初に強調された「中華民族の優秀な文化」、「炎黄子孫」などのキーワードに代わったのは、「民主」や「政治体制改革」である。新春メッセージにおける主張の巧みさは、中国共産党の党是であるマルクス主義、毛沢東思想、鄧小平理論、「三つの代表」思想を擁護するという大原則を掲げた上で³²、「以人為本」、「科学的発展観」などその時々々の指導部の主張を支持している点である。それは「時代とともに前進する」という編集方針の実践でもあり、現体制の主張を擁護しつつ歴史批判に立脚して現実の政治や社会に提言するという手法を構築したことは、『炎黄春秋』の最大の特徴だと考えられる。

2.3. 『炎黄春秋』の人的ネットワーク

蕭克は『炎黄春秋』の強力な庇護者であったが、編集部顧問もまた重要な存在である。創刊当時の顧問は、伍修権、楚凶南、費孝通、屈武、謝冰心、楊静仁、馮文彬、王朝聞、趙朴初、胡潔清の10名で、中でも軍の副総参謀長などを歴任した伍修権、全人代常務委員会副委員長を務めた楚凶南、社会学者の費孝通、作家の謝冰心などの存在により、『炎黄春秋』は政治的な後ろ盾と専門的な権威性を確保していたといえよう³³。

顧問の数名が死去したために2001年第4期からは費孝通、程思遠、陳沂、杜潤生の4名が務めたが、陳沂が死去して2002年第9期から3名となった。2002年第12期には任仲夷が、2003年第4期には周恵が新たに加わって5名となったが、周恵の死去により2005年第1期には4名、費孝通の死去により同年第6期には3名、程思遠の死去により第9期には2名、そして任仲夷の死去により第12期には顧問は杜潤生ただひと

りとなってしまった。長老たちが顧問を務めるということは、『炎黄春秋』の政治的な後ろ盾が堅固であると同時に高齢化が避けられないという現実でもあり、2005年に相次いで顧問が死去したことは象徴的な出来事でもあった。

2006年第1期からは、杜潤生、李昌、于光遠、李銳、李耀文が新たな顧問として名を連ね、同年第6期から現在までは李耀文を除く4名による顧問が名を連ねている。また2004年第7期からは、法律顧問として弁護士張思之と歩凌雲の名前が記載されている。張思之は文化大革命後の四人組裁判でも弁護士を務めた人物であり、同誌の法的擁護の役割を担っているようだ。創刊以降現在の顧問を概観すると、創刊初期には党、政府、軍、文化界の長老たちが名誉職のように名を連ね、その後は社会学者の費孝通と政治や軍事面で強力な背景をもつ程思遠、陳沂、杜潤生、任仲夷らが長期に務めた段階を経て、党内の改革派老幹部として知られる杜潤生、李昌、于光遠、李銳が就任した3つの段階に分けて考えることができる。

特に2006年以降の4名の顧問は、『炎黄春秋』が改革派のオピニオン誌として影響力を強める中で重要な役割を担っている³⁴。4名の顧問に共通するのは、いずれも胡耀邦と深い関わりがあったということだ。1913年生まれ杜潤生は、元中共中央農村政策研究室主任、国務院農村發展研究センター主任を務め、特に農村改革のブレーンとして胡耀邦を支えた。1982年の第12回党大会で農村の生産請負制を合法化した胡耀邦の発言「農村工作の歴史的变化」をはじめ、以後1986年まで5年連続して公布された農村改革の「一号分件」は杜潤生が中心となって起草したものだ³⁵。また、1914年生まれの李昌は中国科学院の党組書記と副院長を務め、胡耀邦とは延安時代からの戦友だった。李昌が提起した「社会主義精神文明建設」は胡耀邦に支持され、その後中央規律検査委員会書記に転じて政治思想分野での胡耀邦のブレーンとして活躍した³⁶。1915年生まれの于光遠は経済学者として知られ、中国社会科学院副院長と顧問を務めた。胡耀邦とはマルクス経済の思想と実践などについて頻りに意見交換し、胡耀邦を回想した文章には同年齢の親しい友人であった記述がみられる³⁷。そして、1917年生まれの李銳は胡耀邦が中央組織部部長在任時の部下で、第12回党大会の人事工

作に関わったほか、胡耀邦が死去する 10 日前の 1989 年 4 月 5 日には胡耀邦と長時間にわたる対談を行い詳細な記録を書き残している³⁸。4 名の顧問はいずれも胡耀邦と同世代であり、特に第 12 回党大会の前後に各分野で胡耀邦を支えたブレイク、友人、部下であった。胡耀邦と深い関わりをもっていた彼らはその後いずれも中顧委を務め、現在では党内の改革派を代表する老幹部として知られている。

発行の最前線で活躍しているのは、創刊以来現在まで炎黄春秋雑誌社社長を務める元新聞出版総署署長の杜導正だ。杜導正は胡耀邦が中宣部部長の在職時期に新華社国内部主任を務め、「胡耀邦の民主的な作風は深い印象を残し、それ以後の仕事における模範ともなった。特に、退職後の雑誌『炎黄春秋』を主宰する仕事では、わたしと同僚たちは一貫して胡耀邦の民主的な作風、人としての在り方、仕事の仕方を学んできた」と胡耀邦から受けた影響について回想している³⁹。胡耀邦の死去からすでに 20 年が過ぎたが、『炎黄春秋』の人的ネットワークにはなお胡耀邦の存在が生きているといえよう。

2009 年第 8 期の時点で、『炎黄春秋』の副社長は徐孔と楊継繩、常務社長と総編集長は呉思が兼任している。編集委員は 42 名で、2009 年第 3 期からはそれまで 33 名だった編集委員が大幅に増強され、李大同や秦暉をはじめとする壮年の知識人たちが新たに編集部に加わった。『炎黄春秋』のウェブサイトには創刊以来の主要な執筆者の文章を閲覧できる項目があり、登録されている 89 名（故人も含む）には、呉江、謝韜、何方、杜光、朱厚沢などの胡耀邦に近かった人物たちの名前がある。『炎黄春秋』には現在の顧問を中心とする政治的に強固な後ろ盾が存在し、経営陣、編集委員、執筆者によって構築されている独自の言論空間には、胡耀邦時代のネットワークが強く反映されていることが指摘される。当然のことながら、そのネットワークの周辺に『炎黄春秋』を支持する多くの読者が存在していることは言うまでもない。

3. 『炎黄春秋』18 年の軌跡

3.1. 表紙、掲載広告からみる『炎黄春秋』

経済の市場化にともない、中国の出版状況は大きく変貌した。カラーのグラビアや広告が色鮮やかな雑誌

が増える中で、シンプルな表紙でざら紙にモノクロ刷りの『炎黄春秋』は極めて地味な存在だ。

創刊号の表紙で目をひくのは、ロゴマークのような「炎黄春秋」のタイトルだ。緑の「炎」、黄色の「黄」、赤の「春」、青の「秋」は、編集部の解説によれば赤は太陽と炎、黄色は黄土の大地、青は晴天と碧水、緑は万物の生命を表し、「炎黄の子孫」である民族の繁栄を表現しているという⁴⁰。4 色で塗り分けられたタイトルは、その後一時期を除いて 1993 年第 12 期まで使用された。タイトルのほかに注目すべきは、掲載記事に関連した写真のコラージュだ。表紙に最も多く掲載されているのは毛沢東の写真で、1991 年の創刊号には若き日の姿が、1993 年は毛沢東生誕 100 周年であったために第 7、8、12 期に各種の写真がコラージュされている。表紙を見る限りでは、歴史の研究雑誌というよりは革命世代の読者に訴えるような同時代的感覚のデザインだ。また、1993 年第 6 期の表紙には、天安門で演説する鄧小平の写真よりも大きな携帯電話を手に微笑む女性の写真がある。いささか唐突な感じがするが、高齢の読者に最新の科学技術を紹介するという意図があったようだ。

表紙のデザインが大幅に変更されたのは 1994 年からで、4 色刷りのタイトルは 1 色刷りに変更され、巻頭論文に関連する写真が大きく掲載されるようになった。その後、1999 年、2001 年、2002 年に若干のデザインが変更され、現在の表紙になったのは 2005 年第 1 期からだ。毎号 1 色で塗られた表紙に白抜きの大きなタイトルが記され、主要な文章の著者名と表題が記されているだけの極めて質素かつ明快なデザインである。創刊以来、長く 4.8 元に抑えられてきた定価は 2006 年第 1 期に 5.8 元、2009 年第 1 期から 6.9 元に値上げされたが、それでも通常の雑誌価格と比較すれば驚くほどの安価だ。「公金もなく、権力機関による割り当て購読もない状況で、刊行物市場という潮の満ち引きで一定の位置を占めて多くの読者の関心と支持を得たのは、本誌が表現する深い思想と高い文化的品位、実事求是と崇高な真理という品格による」というコメントには、編集部の強い自信が読み取れる⁴¹。雑誌コード保持のために文化部に登録されているのは手続き上のことであり、党や政府から財政的な支援を受けず、経済的に独立しているということは『炎黄春秋』の最大の強み

であるといえよう。共産党の老幹部が主宰しているために党発行の雑誌であるかのように誤解されかねないが、実際には党の機関誌ではなく、民間の雑誌社が発行する市販の雑誌である。権力から一銭も得ていないという経済的な独立は、権力に媚びることなく発言するという自由な言論を確保する上で必須のことだ。また、長く広告掲載もせず発行されてきたことは、同誌が自費購入の読者に支持されている事実を裏付けている。紙の価格高騰を理由に2009年からは定価が値上がりし、それに先駆けて2008年からは一部広告も掲載されるようになったが、同類雑誌の広告や高齢の読者を対象とした温泉保養地や補聴器の広告に限定されていることも興味深い。同誌は2007年10月時点で発行部数が約6万冊、2009年7月には10万冊を超えた⁴²。質実剛健な『炎黄春秋』の外観と読者の支持は、編集部と読者の気概を象徴しているかのようだ。

『炎黄春秋』の独自性とは、共産党の改革派老幹部が中心となり、党組織から独立した雑誌を主宰して比較的自由度の高い言論活動を展開していることである。しかし、同誌の性質を正確に理解しなければ、当局の言論政策が全く開放的であるかのような、もしくは急進的な改革論者たちの現状に対する不満を一時的に解消させる手段として『炎黄春秋』が機能しているかのような誤解がないともいえないだろう。同誌の関係者の多くが体制内部にありながら体制批判をも含めた比較的自由的な言論活動を展開している『炎黄春秋』は、独自の言論空間を構築しつつ、さらなる自由度の拡大を探求しているといえよう。

3.2. 目次、主要テーマからみる『炎黄春秋』

創刊以来18年間の各号目次を概観すると、隔月発行であった1991年から1992年は、抗日戦争や革命の歴史に関する文章が大半をしめている。歴史研究というよりも歴史秘話の紹介が多く、懐古趣味的な要素が強い。また、高齢の読者の交流の場という特徴もあり、「炎黄春秋杯囲碁大会」などの行事も頻繁に開催されていたようだ。老人向けの雑誌という印象が徐々に変化したのは2000年代を前にした頃で、1999年第4期に「政治運動は問題を解決しない」という文章が掲載された。これは蕭克をはじめとする20名の共著『我親歴過的政治運動』の前書が転載されたもので、同書は

建国以来の政治運動に対する批判を綴ったものだ⁴³。歴史を懐かしむだけでなく批判的に検証することの必要性を訴えた文章の掲載は、前述した1999年の新春メッセージと共通するもので、『炎黄春秋』の変化を象徴しているといえよう。

2000年以降の目次を見ると、歴史的な事件に関する当事者の回想録だけでなく、書簡や日記などの資料も掲載されるようになった。編集顧問が次々と病に倒れた頃は、病床メモや口述筆記、遺稿などが掲載され、追悼特集が組まれた。時事的なテーマに関する特集を「特稿」として掲載するようになったのは2003年第1期からで、民主法制、政治体制改革、三農問題などについて、歴史に教訓を学ぶという姿勢で活発な議論が展開されている⁴⁴。胡錦濤総書記と温家宝総理による新体制が発足した当時、新たな時代への期待にあふれた楽観的な主張が多くなり、改革をめぐるオピニオン誌としての特色が強まった。

それでは、具体的にどのようなテーマの文章が掲載されているのだろうか。ここではCNKIを活用して1991年創刊号から2009年第6期までを検討する⁴⁵。CNKIでは個別の雑誌について、文章のテーマ、タイトル、キーワード、作者などの情報を調べることが可能だ。データベースでの検索という機械的な作業ではあるが、しかしこのような作業を通じてこそ、何らかの傾向を把握することができよう。例えば、個別の人物や事件について「～を記憶する」というスタイルで書かれた文章を見ると、「憶～」、「～憶」をテーマに書かれた文章は43本、「～を偲ぶ」という意味の「懷念～」をタイトルにするものが28本あった。また、息子や娘などが親世代の政治運動を回想する形式で書かれた文章も多く、タイトルに「父親」を含むものは38本、「母親」は7本あった。

「～主義」をテーマにした文章を検索すると、「マルクス主義」40本、「共産主義」26本、「社会主義」22本という結果だ。中でも、社会主義のあり方をめぐる議論が2007、2008年に集中している点が興味深い。歴史的な人物について検索すると、文章のタイトルに「毛沢東」を含むのは129、「鄧小平」をタイトルに含む文章が50本、テーマとするものは合計95本である。鄧小平が死去した1997年よりも2000年代以降、特に2004年以降に鄧小平関連の文章が多いのは、近年の改革論

議で言及されたためと考えられる。このほか、共産党史においてかつて否定的な評価がなされた人物たちは、「陳独秀」72本、「劉少奇」49本、「王明」14本、「李立三」2本という結果であった。寄稿が多い執筆者は元毛沢東秘書の李鋭の37本で、毛沢東批判、故人の追悼や回想、胡耀邦追悼、言論の自由に関するものなど内容も多岐にわたり、中でも党大会のタイミングに合わせた政治体制改革の提言が特徴的である⁴⁶。

官僚主義を批判して「腐敗」をテーマとする文章は20本、「汚職行為と賄賂」を意味する「貪汚」3本、「意見書提出／直訴」を意味する「上書」は8本だった。一方で「改革」をテーマにした文章は132本で、執筆された年を見ると1990年代は各年1桁だったが2003年以降増加し、改革・開放30周年の2008年には46本の最多であった。『炎黄春秋』で議論されることが多い「政治体制改革」を検索すると、テーマとしたものが30本、そのうちタイトルに含むものが12本で、ほとんどが2003年代以降に掲載されている。「人権」をテーマとする文章は4本、タイトルに「自由」を含む文章は7本、「民主」は77本で、特に2003年と2008年は毎月のように「民主」をタイトルに掲げる文章が掲載された。「民主、自由、平等、人権」を概括する「普遍的価値」という意味の「普世価値」をタイトルに含む文章は8本で、いずれも2008年、2009年の掲載である。2003年以降、特に改革・開放30周年の2008年に改革論議が活発になったことを示している。

CNKI を活用した主要テーマの調査は機械的な検索であるため、各項目について本文中で言及されている文章は実際にはさらに多いと考えられる。限定的な調査結果ではあるが、しかし具体的なテーマや発表された時期などの概観をとらえることは『炎黄春秋』の傾向と変化を把握する上で極めて重要だといえよう。『炎黄春秋』は21世紀直前の1999年頃から歴史批判の性格を強め、胡錦濤総書記、温家宝総理による現指導部の体制発足が発足した2003年からは「政治体制改革」に関する議論が多くなり、2007年以降は社会主義のあり方や普遍的価値をめぐる議論を展開した。歴史雑誌が歴史批判の視点から改革派のオピニオン誌へと変容し、そうした変化が『炎黄春秋』をさらに独自性あふれる言論空間へと発展させたといえよう。

4. 『炎黄春秋』と同時代の振興雑誌

4.1. 『百年潮』

ここでは『炎黄春秋』の存在を比較検討するために、同時代の新興雑誌について考察する。『炎黄春秋』と前後して創刊された類似の雑誌には同時代ならではの共通性があり、それぞれの特徴を比較するなかで『炎黄春秋』の存在がより鮮明に描き出されると考える。

知識人研究が専門で出版事情に精通する丁東は、2002年に発表した「鐘老人の願い」と題した文章で、次のように記している。

この20年近く、中国にはおもしろい文化現象がある。老幹部たちが指導的な部署から退いた後に、新聞や雑誌社の社長や編集長に就任し、素晴らしい活躍をしているのだ。例えば、何家棟先生の『経済学週報』、杜導正先生の『炎黄春秋』、于光遠先生の『方法』、鄭恵先生の『百年潮』などがそうだ。(中略)この20年近くの中国の思想文化の苦難に満ちた歩みを振り返ると、多くの重要な道標は意外にも彼ら引退した老人たちが基礎を定めたのであり、思想文化の領域で新進気鋭の人物たちはいずれも、老人たちが提供した舞台で頭角を現したのである⁴⁷。

タイトルの「鐘老人」とは元中宣部新聞局局長の鐘沛璋のことで、鐘沛璋自身も引退後に雑誌『東方』の社長と総編集を務めた。この文章は丁東が鐘沛璋との交流を記したもので、引用部分は『東方』を紹介する中で類似の新聞と雑誌について言及した箇所である。老幹部たちが引退後に新聞や雑誌を主宰するという「文化現象」の事例の中で、元新聞出版総署署長が社長を務める『炎黄春秋』も挙げられている。ここでは雑誌『百年潮』と『東方』の2誌を例に、主宰者や雑誌の特性から『炎黄春秋』との比較を行いたい。

『百年潮』は中国共産党史学会発行の月刊誌で、1997年に創刊された。中国の近現代史について、政治、経済、外交、文化など幅広い領域に及ぶ重大事件や重要人物に関する文章を発表しており、『炎黄春秋』と極めて類似している。鄭恵は中央党史研究室副主任を退職した後に同学会副会長となり、雑誌創刊にあたって社長に就任した。創刊の発案者であった胡繩は中国社会

科学院院長と中央党史研究室主任を務め、編集長に就任した中国社会科学院近代史研究所の楊天石とともに、『百年潮』の三君子と呼ばれている⁴⁸。『炎黄春秋』の関係者が党、政府、軍の老幹部だったことと比較すれば、『百年潮』の幹部は中共中央党史研究室と中国社会科学院の責任者や学者を中心とする党史研究の専門家たちだ。学会誌という位置づけではあるが、「党史研究の成果は主に党史研究の分野で読まれているという“体内循環”の状況を改めるべきで、(中略)党史研究の学術刊行物を発行するほかに、通俗的で読み応えがある党史、革命史、近現代史の刊行物を発行する」という胡繩の希望によって創刊された経緯がある⁴⁹。研究者だけでなく党の要職にあった老幹部も多く寄稿しており、その点でも『炎黄春秋』と共通しているといえるだろう。CNKI を利用して過去『百年潮』に掲載された文章を概観すると、近現代の歴史的な事件に関する共産党の功績を検討する研究論文と、革命世代が自ら体験した歴史を記述した文章がバランスよく配置されている印象を受ける⁵⁰。

『百年潮』の宗旨は「信史、史学、新知、美文」の八文字だ。「歴史は確かな真実あるべきで、出まかせであってはならない、事実を努力して学び、内容ある文章で表面的であってはならない、知識は最新であるべきで、史料でも観点でも新たな発掘と開拓をすべきであり、周知のものを知らせてはならない、文章は美しくあるべきだが華美な修飾ではなく、構造や言葉遣いが適切で、ぞんざいであってはならない」と解釈されている⁵¹。「信史」に象徴される理念も『炎黄春秋』に共通するが、両誌の最大の相違点は、『百年潮』が創刊以来現在まで歴史の研究誌であり続けているのに対し、『炎黄春秋』が歴史批判に立脚したオピニオン誌へと変貌した点である。共通点が多いだけに両誌の相違点は顕著であり、『炎黄春秋』の近年における変化を特徴づけることができよう。

4.2. 『東方』

『百年潮』と対照的なのが、わずか3年で廃刊した『東方』である。中国の言論問題を研究する傅国涌は、『東方』創刊の背景と主要な作者や掲載記事、そして廃刊の経緯について詳細な研究を発表している⁵²。傅国涌によれば『東方』は文化部が管轄する民間の中国

東方文化研究会が発行していた隔月刊誌で、20世紀初頭に商務院書館が発行していた『東方雑誌』の伝統を継承して1993年に創刊された。創刊者で総編集長の鐘沛璋は、『青年報』総編集長、『中国青年報』副総編集長を歴任し、1980年代には胡耀邦総書記のもとで中宣部新聞局局長を務めた新聞改革の第一人者である。また、実際の編集作業を担当していた李大同は、その後『中国青年報』の付属週刊紙「氷点週刊」の編集主幹を務め、「氷点週刊」の停刊処分に抗議声明を発表したことで知られる人物だ⁵³。

『東方』の執筆者は研究者や作家が中心で、掲載がきっかけとなって注目された若手研究者も多かったようだ。文化や思想を中心とする学術雑誌として創刊されたが、文化批評だけでなく現実の社会、政治、経済についても文章を発表し、知識人たちから強く支持されていたという。傅国涌は「厳格な理論と現実生活に注目した文章は、当時の思想文化界の重苦しい空気を打ち破り、奇跡を起こした」と絶賛する⁵⁴。創刊された1993年は天安門事件からわずか4年後、鄧小平が経済発展の号令を発出した「南巡講話」の翌年だ。民主化運動が弾圧されて間もない頃、価値観が急激に変化しつつある中で、『東方』の存在は知識人にとって重要な意義を有していたと思われる。

しかし、創刊からわずか3年後の1996年、『東方』はわずか19号を発行しただけで中国新聞出版総署期刊管理司の通知を受けて停刊処分となった⁵⁵。現在では、CNKIで『東方』の掲載記事を検索することは不可能だ⁵⁶。処分の直接的な理由となったのは、1996年第3期の文化大革命特集だった。すでに1981年の「歴史決議」によって文革に対する評価は下されていたが、中央宣伝部出版局と中国新聞出版総署期刊司は「期刊出版法規政策須知」に関連文書を掲載し、新聞や雑誌で文革関連の掲載をしないよう指導していたという。『東方』は1996年の文革30周年に際し「文革は中国にあるが、研究は国外にある」状況を変革しようと特集を組んでいたが、文化部報刊宣伝処による事前審査の段階で印刷停止の処分となった。第3期号は表紙に「文化大革命30周年追想」という特集タイトルが記されながら、実際の誌面は発行直前に「環境：生存と発展」に差し替えられたという⁵⁷。この処分は、文革に関する研究や報道が1996年の時点でも依然として厳

しく管理されていたことを具体的に示す事例である。

一方、『炎黄春秋』で発表された文革をテーマとする文章は、創刊以来 134 本が掲載されているが、文革 30 周年で『東方』が停刊処分となった 1996 年は、わずか 2 本だった。その後少しずつ掲載本数を増やして文革 40 周年の 2006 年には 16 本が掲載されたが、掲載本数最多は 2008 年の 21 本だ。記念の年に特集を企画した『東方』とは異なり、『炎黄春秋』における文革関連の文章は毎号個別に掲載され、少しずつ掲載本数が増えている。『東方』が停刊処分にされた 1996 年当時と比較すれば、その後に文革関連の報道が徐々に可能になったという条件もあるだろうが、『炎黄春秋』はわずかならずつではあるがしかし着実に、文革関連の文章掲載を増やしてきたという点が指摘できよう。

文革特集のほかに、『東方』が停刊処分となった背景にはもうひとつの理由があった。思想家であり経済学者でもあった顧准を記念し、1996 年第 2 期の顧准特集号に掲載された李鋭の論文「片時も理論思考せずにはいられない」である⁵⁸。「マルクスが構想した共産主義にも空想はある」、「マルクスのどこか正しくてどこが空想的で実行できないのか、レーニンやスターリン、毛沢東のどこが正しくどんな過ちを犯したのか、いったいどんな問題なのか、理論の問題か実践の問題か、はっきりさせなければ再び過ちを犯してしまうだろう」という李鋭の主張がマルクス主義に反するとして批判されたのだ⁵⁹。マルクス・レーニン主義と毛沢東思想という中国共産党の党是を批判することが、厳しく禁止されていることを明らかにする事例である。停刊処分を受けて鐘沛璋自身も社長と編集長を退き、『東方』は事実上の廃刊となった⁶⁰。

文化批評に立脚した『東方』と歴史批評に立脚した『炎黄春秋』は、いずれも改革派の老幹部が創刊した雑誌だが、老幹部の影響力が大きい『炎黄春秋』に対して、若手の知識人たちが多く活躍したのが『東方』の特徴であった。それぞれの分野から社会や政治への批判を展開した点も共通している。それでは、処分を受けた『東方』と現在でも発行を続ける『炎黄春秋』の決定的な相違点とはどのようなものなのだろうか。『東方』が停刊処分になった 1996 年当時は『炎黄春秋』がオピニオン誌としての性質を強める以前であり、政治環境や言論環境などの諸条件が異なるため、単純な

比較をすることはできない。しかし、文革批判やマルクス・レーニン主義批判などの言論における「禁区」に対する判断基準や具体的な手法、つまり言論活動を展開する上での「政治的尺度」をいかに把握し操作するかという点での相違が、『東方』と『炎黄春秋』の明暗を分けたと考えられる。

5. おわりに

本稿では、雑誌『炎黄春秋』をめぐる政治力学について、『炎黄春秋』創刊の背景、編集方針と人的ネットワーク、掲載された文章の主要なテーマ、他誌との比較の視点から考察した。それぞれの課題について検討した内容を整理すると、以下のとおりである。

第一に、『炎黄春秋』の最大の特徴は軍の長老であった蕭克が中心となって創刊し、党内の改革派老幹部たちが主宰している点だ。特に 2006 年以降の 4 名の顧問は重要な役割を担っており、胡耀邦時代のネットワークが現存していることが顕著である。

第二に、『炎黄春秋』は政治的な後ろ盾と専門的な権威性を確保した歴史雑誌として発行されていたが、近年では歴史批判の立場から時事問題や改革論議を展開するオピニオン誌としての色彩が強くなった。その変化の時期は胡錦濤総書記と温家宝総理による新体制が確立した 2003 年前後で、新体制に対する政治体制改革への期待が誌面に反映されたものと考えられる。2006 年以降は新たな顧問のもとでさらに活発な改革論議を展開し、『炎黄春秋』の独自性が強まっている。

第三に、『炎黄春秋』が独自性を形成する上で重要な条件となっているのは、改革派老幹部による政治的な擁護のほかに、党や政府から財政的な支援を受けずに経済的な独立を基にした言論を貫いている点である。関係者の多くが体制内部にありながら体制批判をも含めた言論活動を展開している『炎黄春秋』は、独自の言論空間を構築しつつ、さらなる自由度の拡大を探求していると考えられる。

第四に、同時代に創刊された他誌との比較では、創刊以来歴史研究誌としての立場を貫いている『百年潮』に対し、歴史批判に立脚してオピニオン誌に変貌した『炎黄春秋』の変化が明らかになった。一方で、オピニオン誌としての性質を強く打ち出した『東方』が文革批判とマルクス・レーニン主義批判を理由に停刊処

分となった事例は、現代中国の言論空間における「禁区」の一端を明らかにしたと同時に、『東方』と『炎黄春秋』における『政治的尺度』の把握と操作」という相違が指摘された。

言論空間の「禁区」に対する「政治的尺度」の問題とは、極めて抽象的な概念だ。しかし、前述した『炎黄春秋』の新春メッセージの事例のように、『炎黄春秋』は中国共産党の党是であるマルクス・レーニン主義、毛沢東思想、鄧小平理論、「三つの代表」思想を擁護するという大原則を掲げ、指導部が新たに打ち出す主張を基本的に支持する姿勢を貫いている。それは一見すると全面的な体制擁護であるかのようにも見られるが、実際に掲載されている文章を見ると、原理原則を掲げて自らの立場を明らかにした上で、言論空間における自由度のさらなる拡大という挑戦を確信的に行っていると考えられる。「政治的尺度」を把握して巧みに操作する執筆者や編集委員たちの挑戦は、政治的な後ろ盾である改革派老幹部の顧問たちによって一定程度確保されており、『炎黄春秋』における政治体制改革の論議を活発化させているだけでなく、体制内部から体制批判を行うという独自の構図を可能にしているといえよう。

『炎黄春秋』をめぐる政治力学とは、「政治的尺度」の把握とその効果的な操作を可能とする人的ネットワークが、『炎黄春秋』の特殊性と優位性を高めていることに集約される。『炎黄春秋』の存在は、現代中国における言論の様相を一定程度反映するものであり、今後継続的な分析が必要であるといえよう。

¹ 例えば、(香港)『亞洲週刊』2009年4月19日号「中共老人呼籲為胡耀邦徹底平反」P.33では、胡耀邦死去20周年記念の報道について『炎黄春秋』が記念の文章を発表したほかは、中国のメディアでは胡耀邦について言及することは許されないと記し、『炎黄春秋』の重要性を指摘している。

² 劉志琴「老革命家の新たな覚醒——『炎黄春秋』の批評と分析——」愛知大学国際中国学研究センター国際シンポジウム、2003年10月31日—11月2日、第3セッション〈文化〉新啓蒙論と新自由主義および新左翼（「中国近代論」と「ポスト・モダン」の評価をめぐるアポリア）、シンポジウム資料集。ただし、2003年時点での報告であるため、同紙の変化についての内容は限定的である。劉志琴の論考と、2008年秋の『炎黄春秋』幹部退任要求事件については、拙論「現代中国の言

論空間における『一二・九知識人』日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 No.9 (2008)、を参照されたい。
<http://atlantic2.gssc.nihon-u.ac.jp/kiyou/pdf09/9-257-268-Oikawa.pdf>。

- ³ 日本国内で発表された学術資料としては、中国報告文学研究会発行『中国ノンフィクション』（1999年）に西井和弥編「炎黄春秋 総目録」が収録されているほかは、国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ CiNii を利用した資料検索では該当する研究論文は見られなかった。
- ⁴ 呉思編集長へのインタビュー（2007年11月5日）。
- ⁵ 「専訪呉思：中国的民主要碎歩前進」『台灣時報』2008年4月5日。
- ⁶ 炎黄春秋ウェブサイト「往期回顾」
<http://www.yhcqw.com/html/wqhg/wqhg.html>
- ⁷ 中国知網（CNKI）<http://www.cnki.net>「期刊大全」より『炎黄春秋』。
- ⁸ 創刊当時は隔月刊で1993年から月刊となった。創刊の背景については、党の保守派イデオログであった胡喬木が支持した雑誌『中華英烈』が財政問題から発行が困難になったため、『炎黄春秋』は『中華英烈』の雑誌コードを引き継いで創刊され、また同時期に、党の老幹部たちが主宰した雑誌『炎黄子孫』が停刊になったため、編集部のスタッフ数名が『炎黄春秋』編集部に移籍したという挿話もある。以上、瀋宇哲「平地驚雷 炎黄春秋的另類生存之道」（2007年7月18日）、<http://www.my1510.cn/article.php?id=e5b0171cacadcf6d>。
- ⁹ 「以弘揚中華民族優秀文化為己任 中華炎黄文化研究会 应运而生」『炎黄春秋』1991年第1期（創刊号）、P.1。
- ¹⁰ 「李瑞環等談中華炎黄文化」『炎黄春秋』1991年第1期、PP.4-5。
- ¹¹ 洛松「蕭克將軍與『炎黄春秋』」『炎黄春秋』2001年第8期、PP.14-16。この文章は2001年8月15日付『光明日報』に転載されたほか、同様の内容が2001年9月11日付『人民日報（海外版）』にも掲載された。蕭克が同誌を擁護した具体例として、創刊号に掲載された李銳「青年毛沢東の心路歷程」の問題がある。李銳の毛沢東評価をめぐり編集部内で反対意見があったが、蕭克が掲載を支持した。発表後に問題視されるようならば、蕭克が審査したことを伝え、意見があれば直接電話をしてくるよう指示したという。前掲、瀋宇哲「平地驚雷 炎黄春秋的另類生存之道」。
- ¹² 蕭克「在新年茶話会上的講話」『炎黄春秋』1992年第2期、P.1。
- ¹³ 蕭克「弘揚中華民族優秀文化傳統 加強社会主义精神文明建設」『炎黄春秋』1994年第5期、PP.4-7。
- ¹⁴ 『炎黄春秋』編集部「蕭克與歷史問題的撥乱反正」2008年第12期、PP.8-9。
- ¹⁵ 蕭克「传统文化在知識經濟時代的歷史使命」『炎黄春秋』

- 1998年7月期、P.2。
- 16 蕭克「党内民主缺失的教訓」2006年第11期、PP.1-5。
- 17 前掲、『炎黄春秋』編集部「蕭克與歷史問題的撥乱反正」。
- 18 前掲、洛松「蕭克將軍與『炎黄春秋』」PP.14-15。
- 19 『炎黄春秋』各号。
- 20 「新春寄語」『炎黄春秋』1992年第1期、P.1。
- 21 「尊重史實是本刊弃刊的原則」『炎黄春秋』1995年第1期、P.4。
- 22 「不敢忘却的“以史為鑑”」『炎黄春秋』1999年第1期、P.2。
- 23 「志存高遠站在時代前列」『炎黄春秋』2000年第1期、P.2。
- 24 杜潤生「『炎黄春秋』的責任」『炎黄春秋』2001年第1期、P.3。
- 25 「新年寄語」『炎黄春秋』2003年第1期、P.80。
- 26 杜潤生「兼顧經濟增長和社会發展」『炎黄春秋』2004年第1期、P.2。
- 27 「新年獻詞」『炎黄春秋』2005年第1期、P.2。
- 28 「我們和歷史一起進步」『炎黄春秋』2006年第1期、P.1。
- 29 「堅持鄧小平理論毫不動搖」『炎黄春秋』2007年第1期、P.1。
- 30 「新的一年、新的期待」『炎黄春秋』2008年第1期、P.1。
- 31 「新年致讀者」『炎黄春秋』2009年第1期、P.1。
- 32 例えば、前掲2005年「新年獻詞」など。
- 33 『炎黄春秋』各号より。
- 34 杜潤生、李昌、于光遠、李銳については、前掲の拙論「現代中国の言論空間における『一二・九知識人』」P.265を参照されたい。
- 35 杜潤生『杜潤生自述：中国農村体制變革重大決策紀實』人民出版社、2005年、PP.135-145、杜潤生『杜潤生改革論集』中国發展出版社、2008年。
- 36 史義軍「李昌與“社会主义精神文明建設”的提出」『炎黄春秋』2005年第8期、PP.46-47、范泓『党内覺醒者 李昌在中国改革年代（上、下）』（香港）明報出版社、2008年。
- 37 于光遠「我與胡耀邦的一段交往」『1978：我親歷的那次歷史大轉折』中央編訳出版社、2008年PP.137-140。
- 38 李銳「胡耀邦去世前的談話」蘇紹智、陳一諮、高文謙『人民心中的胡耀邦』明鏡出版社、2006年、PP.11-44。
- 39 杜導正「感受耀邦的民主作風」『炎黄春秋』2005年第11期、PP.21-22。
- 40 前掲、「新春寄語」『炎黄春秋』1992年第1期、P.1。
- 41 前掲、「志存高遠站在時代前列」『炎黄春秋』2000年第1期、P.2。
- 42 2007年10月15日、2009年7月1日の吳思編集長へのヒアリングによる。2009年7月時点で発行部数は105,300冊、合本作成の3,000冊と予備の1,000冊を除いて毎月ほぼ完売であるという。
- 43 蕭克、李銳、龔育之ほか『我親歷過的政治運動』中央編訳出版社、1998年。
- 44 例えば、李銳「關於我国政治体制改革的建議」『炎黄春秋』2003年第1期、李昌平「農村經濟和政治体制改革的兩筆賬」『炎黄春秋』2004年第4期など。
- 45 前掲、<http://www.cnki.net/>「期刊大全」より『炎黄春秋』。
- 46 拙論、「中国における『老幹部』問題——李銳を中心に——」日本現代中国学会発行『現代中国』第82号、2008年、PP.34-36参照。
- 47 丁東は元山西省社会科学院の研究者で、現在は北京で知識人研究と出版事業を行っている。丁東「鐘老的心愿」2002年、<http://www.taosl.net/wg020a.htm>。
- 48 龔育之「『百年潮』精品系列 序」、楊天石『『百年潮』精品系列 親歷者記憶（上）』上海辞書出版社、2005年、PP.1-4。
- 49 同上、P.1。
- 50 前掲、<http://www.cnki.net/>「期刊大全」より『百年潮』。
- 51 前掲、龔育之「『百年潮』精品系列 序」P.3。
- 52 傅国涌「1992到1996年：『東方』記事」『領導者』第27期、2009年4月号。
<http://www.eyii.com/news/hear/2009527/3713.html> 参照。
- 53 「水点事件」については、前掲「中国における『老幹部』問題——李銳を中心に——」PP.30-33参照。
- 54 前掲、傅国涌「1992到1996年：『東方』記事」。
- 55 中国新聞出版總署「期管字（1996）085号」、前掲、傅国涌「1992到1996年：『東方』記事」。
- 56 筆者の経験では、2003年にCNKIを利用した際には『東方』の掲載記事を検索閲覧することが可能であったが、現在では検索しても該当しない。
- 57 1996年11月1日付文化部「關於東方雜誌的整頓報告」、前掲、傅国涌「1992到1996年：『東方』記事」。
- 58 李銳「一刻也不能没有理論思維」『東方』、1996年第2期。掲載後に抗議の投書があったため李銳は反論の文章「小風波與大悲哀」、「關於『一刻也不能没有理論思維』一文的答辯」を執筆した。2篇の文章は『同舟共進』1997年4月号に掲載されたものがCNKIで検索可能だが、論争の発端となった論文は『東方』に掲載されたために検索不可である。以上、李銳の文章については、『李銳反“左”文選』中央編訳出版社、1998年、PP.384-406。
- 59 同上。李銳が記した『東方』停刊処分の経緯については、『一個老共產黨員的世紀思索』序言『李銳近作——世紀之交留言』（香港）中華國際出版集團有限公司、2003年、PP.270-271参照。
- 60 『東方』はその後一時的に復刊されたが、創刊当初の理念に基づく『東方』は1996年第6期の停刊処分により終結したと考えられている。前掲、傅国涌「1992到1996年：『東方』記事」。

(Received:September 30,2009)

(Issued in internet Edition:November 1,2009)